

・創世記が面白い

一、すべてのものの根源

初めに、神は天地を創造された。(創世記一章一節)

旧約の書き出しの言葉であり、聖書全体の書き出しの言葉でもあります。そして次のような言葉が続きます。

地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。

「光あれ。」

こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。(創世記一章二、三節)

この言葉は、今から約二、五〇〇年前、紀元前六世紀に、イスラエルがバビロニア(今のイラクの先祖)に滅ぼされて、主な人たちがバビロンに抑留された、いわゆる「バビロン捕囚」のさなかに書かれたものだ、といわれます。国家は滅び、体制は崩壊し、都エルサレムは完全に破壊しつくされました。そして、故郷を追われて、バビロンに抑留され、礼拝を守ることもままなりませんでした。

彼らがバビロン(当時の世界最大の都市)で目にしたのは、空中庭園などの壮大な建築や建造物、見るからに荘厳なバビロンの守護神バルドゥクの像の大パレードなどでした。それだけではなく、バビロンの人々から侮辱され続けます。その時の苦しみと悔しさが詩編四二編に示されています。

涸れた谷に鹿が水を求めるように
神よ、わたしの魂はあなたを求める。
神に、命の神に、わたしの魂は渴く。
いつ御前に出て

神の御顔を仰ぐことができるのか。
昼も夜も、わたしの糧は涙ばかり。
人は絶え間なく言う
「お前の神はどこにいる」と。(詩編四二・一～四)

わたしの岩、わたしの神に言おう。
「なぜ、わたしをお忘れになったのか。
なぜ、わたしは敵に虐げられ
嘆きつつ歩くのか。」
わたしを苦しめる者はわたしの骨を砕き

絶え間なく嘲って言う

「お前の神はどこにいる」と。(詩編四二・一〇～一一)

彼らの信じる神は、目に見えないヤーウェ。信じないバビロンの人たちに、どのようにして示せばいいのでしょうか？当時の国と国との戦いは、それぞれの守護神の戦いでした。バビロンの人たちにとっては、バルドゥクがヤーウェに勝利を収めたことにほかなりません。イスラエルの人たちには、彼らの侮辱の言葉に返す何もありませんでした。「夜も昼も、糧は涙ばかり」でした。だが、イスラエルの人たちは祈ります。

なぜうなだれるのか、わたしの魂よ

なぜ呻くのか。

神を待ち望め。

わたしはなお、告白しよう

「御顔こそ、わたしの救い」と。

わたしの神よ。(詩編四二・六～七a、一二、四三・五)

「うなだれ」、「呻く」しかない、そのような状況で、この詩の作者は、自分に言い聞かせるのです。「神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう、『御顔こそ、わたしの救い』と。私の神よ」と。

キリスト教の信仰は、「希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ」(ローマの信徒への手紙4・一八)るのです。イスラエルの歴史の中で最大の暗黒の時代、バビロン捕囚のさ中に、なお彼らは告白するのです。

「初めに、神は天地を創造された。」と。

一九九〇年に、突如として

天に召された東京神学大学の左近淑教授は、その著書「混沌への光」(日本基督教団出版局、一九七五年一月二五日、初版、十九～二〇頁)の中で、こう述べています。

「創世記一章は、世界がどのようにして成立したか、をしるしたものではない。そうではなく、世界と人間の存在の確かさがどこにあるか、という当時の緊急かつ根源的な課題に答えたのである。」

そうなのです。創世記一章は、アメリカの保守的なプロテスタントの人たちが熱狂的に主張しているような、地球生成物語ではありません。聖書が「神のことば」である、と信じるのはいいのですが、科学についても真理を示している、と主張するのは、かつてのガリレオ裁判と同じ誤りを繰り返していることになります。当時の人々の宇宙観は、地球が平らで空が丸い、地球が太陽のまわりを回っているのではなく、太陽が地球のまわりを回っている、と信じていたのです。

聖書は、どこまでも宗教の書であって、科学の書ではありません。宗教は、意味を追求し、科学は、過程を追求するものです。宗教は、主観的であり、科学は、客観的なものです。両者は、互いの領域を尊重し、敬意を払うべきもので、どちらかが優位に立つてはならない、と思います。そこで、もう一度、左近教授の言葉に耳を傾けてください。

「創世記一章はこうした激動期の根源的思考である。これが荒唐無稽な昔話であるとか、古代世

界のどこにもある世界開闢物語といった神話にすぎぬというのは正しくない。自然科学とまったく矛盾する無意味なものだと見るのも本当ではない。」(前出書一九頁)

「創世記一章は混乱と破壊の様相を呈する世界に<秩序>を見、それを<時間>に見たのである。『神は言った』という言葉には、こうした世界を<神の語りかけ>のある世界と信じる信仰がある。世界は神に見捨てられたのではなく、神が語りかけ、それが実現する世界である。創世記一章は倦まずに、神の命令「……なれ」とその実現「……なった」を繰り返す。これは、神の命令は必ず実現するとの信仰の戦いの言葉にほかならない。」(前出書二二頁)

私の表現で言わせてもらうなら、創世記一章は、「すべての根源は神にある」ということを主張しているのです。「人あるがゆえに神あり」ではなく、「神あるゆえに人あり」なのです。「初めに」というのは、時間的な「初め」だけではなく、空間的な(存在の)「初め」をも指しています。神がいなければ、この私は存在しないのです。神がいなければ、「今、ここ」に、私はいないのです。神は天地の創造者である、というのは、そういうことだ、と私は信じています。

私は、偶然の産物ではなく、神が意味と目的をもって生み出されたものです。この神を抜きにして、私の存在の意味は分かりません。どんな生命も、無意味に存在しません。それを人間が勝手に意味や価値(無意味、無価値も含めて)をつけようとするを「罪」というのです。

「はじめに」に、引用しました「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」も絶望的になっていたバビロン捕囚時代の人々が子どもを産んでも仕方がない、と沈んでいた人たちに対する激励の意味が窺われていた、と考えるべきではないでしょうか？

群馬県の東村に、存立の富弘美術館が一九九〇年に出来ました。広い駐車場をもったすばらしい美術館で、毎日、全国から大勢の人が貸切バスを連ねて見に来ています。もはや群馬県の新しい観光名所といってもいいでしょう。この美術館には、星野富弘という四七歳のクリスチャンの絵と詩を展示しています。彼は、大学を卒業して、中学の体育の教師になって二カ月に頸椎複雑骨折という事故に遭います。九年間の入院生活をしますが、結局、首から下は動かなくなるという重度の障害者になってしまいました。入院中に信仰を持ち、口に筆をくわえて花の絵と詩を書き始めます。とても平易な言葉と口で書いたとは思えない繊細な美しい絵で、人々の心を奪いました。

彼が怪我をした時には、全く絶望し、何度も死を願ったほどでしたが、天地創造の神に出会って、彼は生まれ変わります。「ひょっとすると、失うことと、与えられるということはとなり同士ではないか」と言うほど彼は今、生き生きと明るく過ごしておられます。彼は、東村の名誉村民とされて、村の人から愛され、村の誇りとさえなっています。彼は、今も自分で体を動かすことはできませんが、無数の人たちの心を動かし続けています。その美術館の真ん中の一部屋に、ただ一枚のこんな詩がかけてありました。

人間のすることはわずかだ
わたしのすることもわずかだ
でも そのわずかを
感謝して できたなら
それは きっとおおきなことだ

「初めに、神は、天地を創造された」〈創世記 1-1〉